

二子山城物語

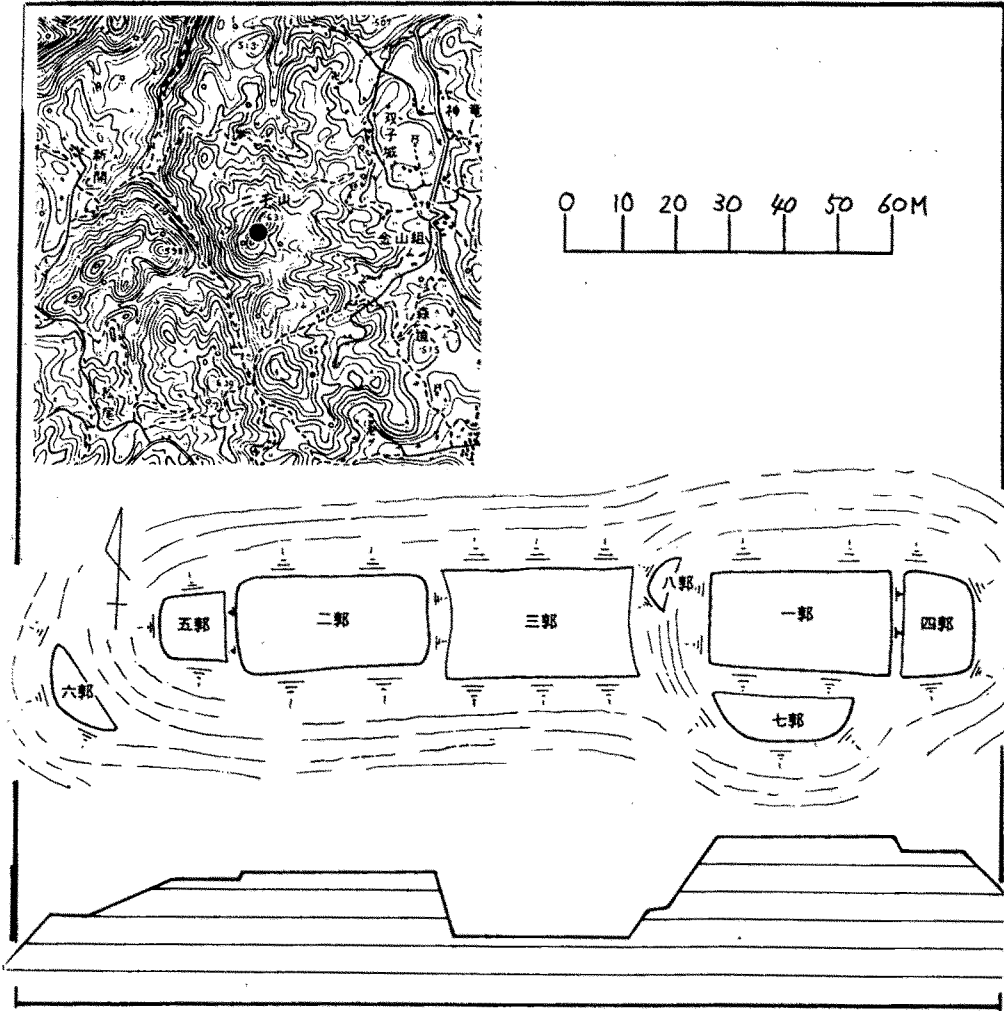
武島種一

神石町内に中世の山城跡とされているものが17あり、内14が調査を完了しています。

ただ、何者が城主であったかは 確実視されるものと、そうでないものがありますが、言えることは大部分の城は備後の豪族宮氏の一族、又はその支配下にある者が住んでいたようです。

それぞれの城の興亡は、御多分に洩れず尼子と毛利氏の関係する諸々の合戦に参加した機様が伝えられています。

今回はその中で、子孫が萩藩へ仕えたと思われる 神石町永野にある二子山城について述べて見たいと思います。



二子山城略測図（神石町山城分布調査書1983より）

二子山城跡の位置、ならびに本丸を中心にした略測図は別表の通りですが天下の名勝帝釈峽神竜湖畔犬瀬より500mほど上った所にあり、近くに帝釈峽観音堂洞窟遺跡があります。

城主横山氏は武蔵七党にして武蔵国多摩郡横山より起っています。横山氏は小野姓にして姝子の後裔とされています。

初代城主とされている横山権頭時広は鎌倉殿より武州横山の庄、並に淡州(淡路島)を賜り、又備中にも所領あり、神石郡永野も領していたようです。

時広の男左馬允時兼、和田合戦に参加するも、敗れて備中を経て備後国長野村二子山城主とあります(「神石郡誌」「西備名区」)。

ところが、神石郡誌によると横山経時、時広、時兼、重兼を経て、寛元年中、山城国北嵯峨より横山判官重忠来り威を四隣に張るとあります。

神石町内に重忠の末裔と名乗る家があり、この系図によりますと、時広、時兼等はなく重忠が初代の城主となっており、菩提寺法光寺(神石町永野)の過去帖によると、栄興院殿霜峯義剣大居士兩児山曾祖重忠公 寛元四年三月朔日に没していますが、初代が来て2～3年内に四隣に威を張るといふのはどうかと思いますが、これらを年代から見ますと和田合戦は1213年ですから、重忠が来たとする寛元は1243～1247年ですので「西備名区」による横山権頭時広か横山右馬允時兼を初代とするのが正しいように思われます。

重忠は山城国より来たとあることからしますと、同族(姓)ではあっても流れが異なるのではないのでしょうか。そこらがどう交替をしたのか不明です。

重忠より5代目に当る、城主横山兵部大夫忠義延文3年(1358)、備中天竺上野介攻めよせたるもこれを撃退し、追撃せるも討死したとあり、この合戦で討死した将士を合葬し八つの塚とするによって「八塚」といい、この戦を八塚合戦という(「神石郡誌」とあり、この塚の上には五輪塔がありますがこの合戦の時代とこの塚をつくった時代はどちらも年代的に相違があるのではないかと考えられます。

戦後盜堀が行なわれ、刀剣類が出たという話もあります。

忠義の室に子なく、悲歎して、薙髪しその祖重忠より伝える守本尊虚空蔵菩薩を奉安し、二子山麓に住庵、夫の菩提をとむらえり(「神石郡誌」と、これは、二子山城跡略測図の6郭に尼寺ありしという伝承があり、是が、現在ある曹洞宗法光寺の起源となったようです。

城主は、重忠以来9代義国(延徳元年9月25日没)まで続いて(法光寺過去帖)いますが10代義隆は神石町草木榎原山に城を築き、これに移り天文15年7月没す、とありますが神石郡誌によると天文22年毛利元就が比婆郡西城町の大富山城を攻めた時城主宮氏の応援にいったとあるのはなんと理解できない歴史の面白いところです。

この義隆は、何故二子山城から榎原山城に移ったのか、子隆国は天文8年沼隈郡津之郷村小森城に移っていますが、横山河内守義隆一代で榎原山城は終わったようです、が(これは義隆以降の戒名による)実際はどんな変遷があったのか今後研究して見たいものです。

萩藩に二子山城主の子孫と思われる横山氏があり、禄高450石を給されていますが、唯係図が小野姝子より二子山城主とされる時広、時兼を見ることができることからして備後横山氏は嫡流である

ことが分りますが、時兼以後の系図が不詳です。理由は毛利元就の曾孫秀就の上覧に差出したが返却されざる由による（萩藩諸家系譜）、とあります。二子山城主のどの系列とどうつながるのか判明しませんが、つながる確実性は高いといわれています。

義隆が榎原山城へ移った後へ官左衛門尉元安が入っていますが、横山氏が最初備中より入って来て住んだのが和田という所で、面白いことにここは、宮氏が城主であった黒岩城の出口であることは、歴史に現れないいろいろのことがあったのではないかと思います。

いろいろと二子山城に関する話をつなぎ合せただけのことになり、参考価値の低い結果となりましたがこれは私の勉強不足の為で今後精出して町内の山城物語を調査研究していいものを報告したいと思います。

（ 神石町文化財保護委員長 ）